私見創見 Tuesday

「至誠天に通ず」

大村智博士

三浦　和彦
東京理科大教授

みうら・かずひこ
1955年八戸市生まれ。東京理科大学大学院修士課程修了。認定ＮＰＯ法人富士山測候所を活用する会事務局長。今年１月から八戸特派大使。東京在住。

2月4日は二十四節気の立春であるが、朝晩はまだまだ寒い。

12日で14歳になるわが家の愛犬は、朝、ストーブを付けるとその前に来て温風を顔に受け心地良さそうにしている。

犬の平均寿命はこの30年で2倍に伸びたという報告もあるが、その理由の一つとして、犬の心臓に線虫がすみつくフィラリア症の特効薬が開発されたことが挙げられる。その特効薬を開発されたのは昨年ノーベル生理学医学賞を受賞された大村智博士である。

博士は山梨大学を卒業された後に都立の夜間高校の教師になられたが、夜学生の学ぶ姿を見てもう一度勉強し直そうと思い、昼は東京理科大学大学院に入り週末に徹夜の実験を続けたそうである。

29歳の時に北里研究所に入所し、微生物が産生する新しい化学物質を見つける研究を続けた。北里研究所では、土の採取、微生物の分離・培養、化合物の構造決定を分担して行うという共同研究を行った。そして480種を越える新しい化合物を発見し、そのうち26種が医薬、動物薬、研究用試薬として実用化されている。

その中の一つがイベルメクチンで、アフリカや南米の熱帯地方の風土病、オンコセルカ症（河川盲目症）やリンパ系フィラリア症を予防、治療する特効薬である。毎年3億人もの人々がこの薬を飲むことにより盲目や重症になるのを逃れ、オンコセルカ症は撲滅されつつある。この業績により、共同で開発した米国製薬会社メルク社のキャンベル博士とともにノーベル生理学医学賞を受賞された。

博士は、研究者としてすぐれた業績を残しただけではなく、いろいろな面で活躍されている。

これらの研究のためには莫大な費用が必要であるが、米国留学の際にメルク社と当時日本では珍しかった産学連携契約を結ばれた。この方式はオオムラ方式と呼ばれるが、のちに北里研究所に250億円もの特許料収入をもたらし、当時、経営状態が不振だった北里研究所の経営を再建された。埼玉県北本市には北里大学メディカルセンター病院を建設したが、院内の壁面にはたくさんの絵画を展示し、「美術館病院」とも呼ばれている。美術への造詣も深く、絵画のコレクターとしても知られており、東京女子美術大学の理事長を14年間勤められた。私費による韮崎大村美術館の建設や公益社団法人山梨科学アカデミーを創設し、科学啓蒙活動を行っている。人材育成にも力を注ぎ、大村研究室から輩出した教授は31人、博士号取得者は120人を越える。

博士は「当時、人間の抗生物質はあらかた開発されていたので、未開拓の動物用抗生物質を開発したいと思った。畜産動物の抗生物質の開発で畜産生産高を上げることができれば人類への貢献になるし、畜産動物に効くとなれば、人間にもすぐに導入できる可能性があると思った」（馬場錬成著『大村智物語』中央公論新社）という。また「人と同じことや真似をしても価値はない。真似をしたらそこで終わりだ。自分のやったことは大体失敗してきた。ときにはびっくりするくらい、うまく行くことがある。それを味わうと何回失敗しても怖くない」とも言っている。

博士が好んで使われる言葉が「至誠天に通ず」である。「ある地位についたら、あらゆる努力をする。そうすれば目指したものは大体実現できる。ごまかしていい加減にやっているとダメだが、一生懸命にやっていれば必ず支援者も現れる」

十和田キャンパスがある北里研究所、母校である東京理科大学、私立大学出身初めてのノーベル賞受賞者は誇りである。